

# せりょう園

[発行] 社会福祉法人はりま福祉会 特別養護老人ホームせりょう園

〒675-0016 兵庫県加古川市野口町長砂 95-20 TEL 079-421-7156 FAX 079-421-6422

平成27年 9月 第175号 年間購読料1,000円 (1部100円)

メール seiryoen@bb.banban.jp ホームページ <http://www.seiryoen.or.jp>

## 終末期医療と延命治療

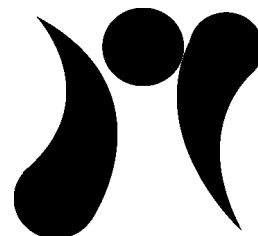
### —介護の可能性と創造性について—

平成25年度医療費総額39.3兆円の内訳は、75才以上者の医療保険適用が14.2兆円、75才未満者の医療保険適用が23.1兆円、公費負担分が2兆円となり、一人当たり医療費では、75才以上は92.7万円、75才未満は20.7万円となります。26年度は40兆円を超えた、と最近報道されました。

今の医療保険制度をそのまま運用するとなれば、団塊世代の全員が75才を超える2025年以降の深刻な状況が、団塊の一員として身に染みて解ります。その様な背景の下で、元総務大臣の増田寛也さんが、毎日新聞5月24日付朝刊『時代の風』に『終末期医療のあり方』について『延命治療の議論が必要』とした一文を載せられています。

『終末期の人工栄養による延命は、世界的にみると必ずしも当たり前のことではない。むしろ、自分で食べられなくなったときに、介護者が無理に食べさせることや胃瘻や点滴などの人工栄養で延命を図ることは非倫理的であるとさえ認識されている国がある。例えば、スウェーデンでは、口からものを食べられなくなってから約2週間でみとられている。食べられなくなったときに人工栄養を行わないと脱水や低栄養が起る。専門の医師に聞いたところ、このようになると、βエンドルフィンというホルモンの分泌や血中のケトン体の増加により、むしろ呼吸が楽になり、痛みや苦しさが減る「緩和ケア」になっているという。人間の身体は、枯れるように穏やかに最期を迎えられるようにできているというのである。本人が食べられるだけ、飲めるだけにして、点滴や経管栄養を行わずにいると、亡くなる数日前まで話すことができ、穏やかな最期を迎えられる。アメリカ、オランダ、オーストラリアなどでもスウェーデンと同様に、終末期の人工栄養は行わないことが一般的であるようだ。』『世界の先頭で超高齢化時代を迎えているわが国では、この終末期医療の問題を医学界のみならず、倫理面からも法律面からも深く議論を開始すべき時期にきていると思うのである。』

(次ページへつづく)



(前ページのつづき)

介護事業に携る団塊の一員として、全面的に賛成します。欧米諸国で高齢者人口が7%を超えて『高齢化社会』に入った段階で、多くの高齢者が老いて病気や障害・死と向き合う現実と直面し、命の長さに対して『命の質』を問う姿勢が強くなって、『QOLの尊重』という理念が拡がりました。

生殖機能を失って後も30年～40年と生き、尚且つ、老いた命を集団の中で看取る動物は人間のみです。人間が社会を構成して生きるには『遺伝子では引継げない』重要なものがあり、それが『老いの暮らしと看取りの営み』の中で、引き継がれてきたように思えます。終末期の暮らしは当然に老いて病気や障害・死と向き合います。そして心の葛藤を繰返しながら柔軟に受け容れ、精神的な営みの成果として思想や宗教を生み出しました。その思想や宗教を核として人は、命の質を量る物差しを創り、理念と手法を確立したのです。

京都の特養の医師である中村仁一先生は『老人が自然に死んで見せる事』の重要性を話されます。東京の特養配置医師の石飛幸三先生は、『平穏死の大切さ』を説かれます。特養のお二人の医師が提唱される『自然な老いと死を肯定する姿勢』は、『介護の可能性』を強く示唆しているように感じます。

『自然の摂理を超えた医療技術』で高齢者の延命を図るとき、医療費の増大に反比例する様な形で、『生身の人間』として伝えるべき思想や社会性が見失われるように思います。超高齢化と超少子化が同時に進行してきたこの『40年間の人口推移』は、『伝えるべきものを見失って硬直化した人と社会』を見事に現しているように思えます。

限りある命を生きる生身の人間は、『柔軟に変化し得る社会』を創って長く歴史を続けてきました。命の質を量る物差しを創り、新たな命の誕生を支えて来ました。若くて生殖機能を有する人がもっと生きたいと願う『個体保存の本能』は『種の保存本能』と一致して『遺伝子を伝える』という社会的使命を有しますが、生殖機能を失って後、終末期を生きる人の社会的使命は、自然の摂理に添って老いを生き、本能によって死期を悟り、仲間に身を任せて穏やかに人生を締め括る暮らしです。予防や健康を求めての努力は、老いに伴う心身の変化とその最期に柔軟に寄り添う営みであって欲しい、と切に願います。

地域包括ケアシステムは『未来への責任を果たす途』であると同時に『介護が未来社会の礎を創る極めて創造的な営み』である事の証明にもなります。

限りある命の自然な最期を介護が支え、遺伝子では伝わらない思想や社会性を次の世代に引継ぎ、団塊世代の後に続く人々が、柔軟に変化し得る社会を創って永く歴史を続けて欲しい、と心より念じます。

せいりょう園 渋谷 哲

### 【せいりょう園空き情報 平成27年9月16日現在】

- ① ケアハウス：3室 (バス・トイレ・キッチン付24㎡)
- ② グループホーム：空きなし
- ③ グループホームまどか：空きなし
- ④ サービス付き高齢者向け住宅「リバティかこがわ」：4室
- ⑤ サービス付き高齢者向け住宅「自愛の家さくら」：空きあり

【問合せ先】 せいりょう園 TEL(079)421-7156/(079)424-3433



## 介護支援専門員 木村 多恵子

せいりょう園で、ケアマネジャーの仕事始めて10ヶ月が過ぎようとしています。ヘルパーとして現場で仕事をしていた私には、全く新しい世界へ飛び込んでいくようなものでした。私に務まるのかという漠然とした不安と新しいことに挑戦するという期待が交錯し、何とも言えない思いをもっていました。

ヘルパーをしている時に、出会ったケアマネジャーの方々を見て、私が感じていたのは話を聞くことの大切さでした。あるケアマネジャーは、利用者の話に耳を傾けず、事務的に、ただ用件のみを伝えるだけで、利用者の立場に立っていないのではと感じました。又、あるケアマネジャーは、利用者・訪問看護・ヘルパーの話を少しだけ聞きかじって内容を理解しないまま話をすすめて、利用者の希望とは異なる対応を行い、関係者間の信頼関係をこわすようなことをしていました。そのような中で、利用者の方の話をじっくり聞いたあとに、ゆっくりと話しをされるケアマネジャーがいました。その方は利用者をはじめご家族・関係者にも信頼されており、その方の訪問を心待ちにされておりました。私は、そのケアマネジャーを見て、人の話を親身になって聞くという事が、どれほど難しく、又、どれほど大切なのかを学ばせて頂くと同時に、自分がケアマネジャーになった際には、その方をお手本にしたいと思いました。

先日、担当して2週間で利用者がお亡くなりになりました。春から、家族と同居されたという事もあり、ご本人は家族に迷惑をかけるのは申し訳ないと思い、又、家族は自分たちが介護をやらなければと頑張っただけでこられました。しかし、家族に介護疲れが出始めて相談にこられました。ご本人のお風呂に入りたいという希望があり、デイサービスを利用されました。初めてのデイサービスは楽しかったようで、「また行きたい。」と話されていたようですが、その後入院となり、お亡くなりになりました。

訃報を受けて、ご本人の話にもっと耳を傾ける必要があったのではないか、ご家族の話をもっと聞いたのではないかと、もっと出来る事はなかったのかと思いました。この経験を活かし、一層、利用者・ご家族・関係者の方の話を聞いて、よりよい支援ができるように努力をしていきます。そのためには、ケアマネジャーに求められる専門性に磨きをかけ、誰からも慕われ、信頼されるようにならなければと思います。いまから、色々な経験を重ねて、そのような姿を目指したいと思います。



## 平成27年8月13日（金） お盆の法要



毎年、円長寺ご住職より御読経を賜ります。これまでに、特養で看取りを終えた、せいりょう園の入居者は、344名です。

看取りに関わったご家族・職員は、深い『学び』を頂いております。

改めて『感謝』の時間となりました。

せいりょう園で、母を看取られた御家族より手紙を頂きました。  
ご了承の上、機関誌に記載いたします。



看取り介護に感謝



岡村 久一

母は、7月7日せいりょう園において永眠しました。89歳5か月でした。

母を施設に入所させたことが、罪悪感として残っていました。自宅介護の状況を見聞きしたり、小谷あゆみ先生の「介護達人は人生の達人」の講演で、「介護する事の喜び、介護することに幸せをかんじている人がおられる。」と聞いた際には心が痛みました。こんな時には、藤川幸之助先生の「支える側が支えられるとき～認知症の母が教えてくれたこと～」の講演で、「施設に入所させたことへの罪悪感を捨てよう。自分にできる介護はこれ以上無理だ。自分が限界だと思ったのであるから。」とのお話しを思い出し、これで良かったのだと自分に言い聞かせました。

今年に入り急に体力が衰えてきた母は、爆睡時間が長くなりました。このため、会話の機会も殆ど無くなり「母の顔 穴が開くほど 見て帰る」状況となりました。そして、7月1日には主治医の西村先生から「あと4日は大丈夫だが。」と告げられ、6日後に人生の幕を閉じました。

私は、点滴などの延命治療を希望しませんでした。それは、石飛幸三先生の「変革の時を迎えた高齢者終末期医療と介護」の講演や、中村仁一先生の「大往生したけりゃ医療とかかわるな」の講演で、「死にゆく自然の過程を邪魔しない。水分を摂らず食べないから死ぬのではなく、死ぬ時期が来たから水分も摂らず食べないのである。」との話しに共感していたからです。しかし、看取り期の母を目の当たりにすると、つい「元気か。久一が来たよ。」



## 平成27年8月20日（木）街角ピアノ・コンサート



夏休みに中学生2名が訪れ、皆さんにピアノの弾き語りを披露してくれました。「ふるさと」「見上げてごらん夜の星を」等、弾かれると聴きにきた皆さんは自然と口ずさんでいました。

2名による連弾もあり、「上手やねえ～」「有難う」と笑顔で中学生に声をかける光景も多く見られました。

と耳元で声を掛け“お邪魔虫”をしたり、唇が乾燥しているのを見て喉が渴いていると思  
い、無理矢理アイスクリームを一口でも食べさせようと“拷問”してしまいました。

いいこともありました。母が入所した際に、「なんで胃瘻しないのか。」と言っていた弟が  
穏やかな表情で安らかに眠っている母の顔をしみじみと見ながら「胃瘻をしなくて良かった  
なあ。」と言ってくれたことです。

母が、せいりょう園にお世話になったのは、平成21年9月からのショートステイ、そし  
て12月からの特養と通算6年間となります。

入所間もないころには、ダメだと覚悟した時期もありましたが職員の皆様のお陰で奇跡の  
回復ができた上、体調が変化する母の法定速度に見合った介護を賜りましてありがとうござ  
いしました。体を動かすことができず口だけが達者な時には、頻繁にナースコールを鳴らして  
いろいろと注文を付けご迷惑をおかけしたそうですが、その都度対応してくださりありがとう  
ございました。

また私が訪れた際には、体温、血圧は勿論のこと、「今日は食事をとられましたよ。」「今  
日は食事を吐き出されました。」「アイスクリームを三口も食べられましたよ。」などと、日  
増しに体力が衰える変化具合を細かく教えていただきました。たまにしか訪れなかった私に  
その時が段々と近付いていることの認識ができたことは大変有難く嬉しく思いました。

天寿を全うし、老衰という一番幸せな人生を終えることができましたのも、偏に施設長、  
職員の皆さん、主治医、機能訓練士が一体となって、母に見合った介護、最期の時まで寄り  
添う看取り介護をいただいたお陰と感謝し御礼申し上げます。母もせいりょう園に入所した  
ことをきっと喜んでくれていると思います。

遺影は、居室で曾孫が車いすを押した際に、満面の笑みを浮かべ至福の表情をした時のも  
のに決めました。せいりょう園にいたからこそこの写真です。

最後となりましたが、社会福祉法人はりま福祉会特別養護老人ホームのますますのご発展  
と職員の皆様のご健勝をお祈りいたします。

本当にありがとうございました。

#### 【せいりょう園待機者状況 平成27年9月11日現在】

○入所判定済み者 354人（グループの内）

Iグループ…110名 IIグループ…124名 IIIグループ…106名

【平成27年3月末迄の判定】

65点以上…11名 80点以上… 1名 90点以上… 2名

【平成27年4月1日以降の判定】

※このグループ分けは、県の「入所判定マニュアル」に基づき、緊急性を  
評価して分けています。Iグループが最も緊急性の高いグループとなっ  
ています。判定後、状況の変化がありましたら、ご連絡下さい。

平成27年4月より、県の「入所判定マニュアル」の制度が変わりました。

100点満点中、点数の高い方が入所対象となります。但し、直接本人・家族  
に話を聞いて、入所の緊急性を判断します。要介護1または2で、点数が65点  
以下の方は「非該当」となります。但し、介護の必要性・在宅介護の困難性が高い  
場合には、特例入所の必要性が高いと判断します。



## 仏教講話 9月7日(月)



真宗 大谷派 光念寺  
本多 正尚 住職

ディサービス 谷澤 高明

仏教講話がお休みのふたつきの間、世界中でいろんなニュースが飛び交った。自分の心に最も深く残った2件。中学生男女の殺害事件と台風15号である。台風は幼いころから数えきれぬほど記憶に残っている。わが家は村はずれの小さな一軒家。毎年のように襲ってくる台風への両親の対応は、それは謙虚であった。父は玄関の雨戸を打ち付け、ご丁寧に内側から畳をあてがっていた。母は風呂に水を張り、メシを一杯炊き、梅干しを入れたニギリメシをいやというほどたくさん作った。おかげで私の記憶では一度も、家が崩壊したり、避難したこともない。あるのは台風が去った後、何日も硬くなった冷たい握り飯を食べさせられた辛さだ。子供心にも閉口した。しかし記憶にある風速はせいぜい20～25㍎。30㍎を超えたようなことはなかったと思う。ところが今回の台風15号の風速は65～70㍎。冗談じゃない、本当に。私の頭では到底理解できない。石原裕次郎の映画『風速40メートル(1958年作品)』を記憶されている方もあるだろうか。その主題歌『何だいありゃ?何、風速40㍎ ハハハ……。風が吹く 吹く、やけに吹きやがると、風に向かって進みたくなるのさ。……。みんな飛んじゃえ、飛んじゃえ、俺は負けないぜ!!』勿論これは災害映画ではない。企業乗っ取りに絡む人間ドラマであったが、当時としては考えられない、とんでもない怪物として『40㍎』を使ったのである。15号では60㍎を超え、車が道路の向こうまで飛ばされ、走行中のトラックが横転した。電信柱があちこちでなぎ倒された。「こんなにひどい風は生まれて初めてです」という人々の声が不気味に響いた。

今月の仏教講話は真宗 大谷派 光念寺 本多正尚ご住職に来て頂いた。四方山話に続いて本日のテーマに入って行かれた。「我々は心豊かに、人を信頼して生きてゆくというのはなかなか難しいことです。まわりのモノの優れたところ、素晴らしいところを見ることが出来る眼差しを持ち、聞こえる耳を持ちながら、見ようとしない、聞こうとしない。余計なことの方が伝わりやすいものです。そして自分の都合の方が先に立ちがちです」。極端な例を二つ話された。

最初の話は、非情な難産で、医師から母親と赤子の両方を助けるのは難しい、どちらかの命をとるしか仕方がないと告げられる。家族は子供はまた授かることがあるだろうから、母親を助けてやってほしいと言う。ところが本人(母親)は、この子は二度と生れて来ることはできない。闇から闇に葬られてしまえば、この世を一度も経験できない。自分はこの世を経験できたし、大丈夫です。私はもう十分です。如来さまのもとへ帰らせて下さい、と願う。

次の話は、高校受験生の娘さんの話。一生懸命受験勉強をして、入試に向かったが、第1志望校に落ち、第2志望校にも失敗する。仕方なく、ここしかないという学校に入学する。制服を着て通学を始めた。そんなある日、帰宅途中、母親が知人と話しながら道路の向こう側を歩いてくる。「おかあーさん」と声をかけたが、母親は気付かずに行ってしまった。その夜帰って、そのことを話したら、「ゴメンネ、お友達と一緒にやったので、手振れなかったんよ。制服見たら学校分ってしまうから、恥ずかしくて…」。娘は登校しなくなった。

都合のよい時は、頭を撫でてくれる。都合が悪くなると、こんな子知らんという態度をとる。人は、とっさの場合、生来身に付いたものが出る、出てしまう。先人もそれを救うために苦悶し、自らその術を見いだした。聖徳太子は十七条憲法で『篤く三宝を敬え、三宝とは仏法僧なり。それ三宝を信ぜずしては何をもってか曲がれるを直らせん』(仏教の教えによってでないと私たちの曲がった心を直すことはできない)。ある先人は、自分はお釈迦様より後に生まれてきて幸いであった。なぜなら自分はことある毎にお釈迦様の尊い教えをきくことができるから。それはお釈迦様が話されたことを弟子たちがまとめて作り上げた『お経』のおかげである。『経』という字は『たて糸』を意味し、たて糸がしっかりしているから横糸を張ることができ、それでいろんな『柄』ができるとか。人間も縦糸がしっかりしていないと、一本筋の通ったものになれない。いずれにしても先人が残してくれた想いを教訓にしたいものである。

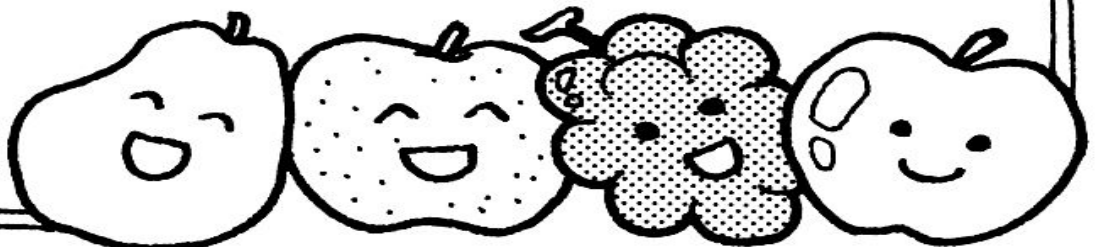
最後に、「人間だれしも『いい人だったねー』と云って欲しいものですね！しかしそうなるには、一朝一夕にはなれません。いろんな人のおかげで生きているのですね。自分勝手な都合で人を選別してはいけません。自分が忌み嫌っている人からも多くの恩恵を受けているかもしれませぬ。自分は嫌っていても、相手はそうでないかもしれませぬ。たくさんの人のおかげがあって生きていけるのだということをしっかり自覚したいですね。そしてそのことを次世代の人に伝えてほしいです。どんなカタチでもいいんです」。いつものようにバトンタッチの大切さを話されて講話は終わった。ありがとうございました。次月は10月5日の予定です。

## 厨房だより

## 管理栄養士 田村愛弓

9月も下旬に差し掛かり、秋の雰囲気が強く感じられるようになりました。夏場に落ちていた食欲が戻ってこられた方も多いのではないのでしょうか。昔から「食欲の秋」というように、秋はおいしい食べ物が多く食欲が刺激される時期です。秋の味覚といえば、さつまいもや栗、ぎんなんなどを思い浮かべると思います。これら秋の味覚はみな共通して糖質やビタミンB<sub>1</sub>を多く含み、少量摂取でも効率よくエネルギー補給できる食材です。ですから秋太りの原因にもなるので、食べ過ぎには注意が必要です。その他、ビタミンCやカリウムも多く含んでいるので、気温の変化で風邪をひきやすくなる秋から冬にかけての季節には心強い味方となる食材です。同じく秋の味覚のきのこ類では、総じてビタミン類を豊富に含んでいます。腸の状態を整える以外にも骨を強くしたり肌の状態を整えてくれたりと、身体の健康維持に役立つ嬉しい効果があります。

秋は本当においしい食べ物が多い季節です。食べ過ぎや食の偏りには注意しながら、旬の味覚を楽しく味わいましょう。



## 介護についてみんなで語ろう会（8月28日）

### テーマ 『地域で暮らす』～デイサービス・訪問介護について～

機関誌には内容を暫く記載していませんが、毎月第4金曜日に「介護についてみんなで語ろう会」を、せいりょう園リバティかこがわ2階で14時～15時に行っています。

今年度は、介護が必要な状態になっても「住み慣れた地域で暮らす」を大きなテーマとして、話し合う場を設けています。今回は、デイサービス・ヘルパーのサービスを利用して、サ高住リバティかこがわに住んでいるKさんとデイ主任とヘルパー主任、地域の方々が輪になって語り合いました。

内容の一部を紹介します。

地域：サービスを利用したら、いくらお金が掛かるのか知りたい。たくさん使いたくてもお金がかかるのではないですか？

職員：サービス利用に至るには、ケアマネに相談し、利用される方の必要なニーズに合わせて計画を立てています。ほとんどの方が利用限度内で納まります。

地域：男性で、周囲はサービス利用を勧めるが、拒否されており、心配です。

地域：男性はプライドがあるので難しい。花見など楽しい雰囲気の中に連れ出すのがいいのでは？

地域：自分も男性だが、逆にサービスを使いたい。その為に勉強会に来ています。妻が亡くなっているので、自宅にいたい思いはあるが、どこまでいる事ができるのか、見極めが難しいです。

職員：サービス拒否の方に受け入れてもらうには時間がかかりますが、ケアマネや民生委員の方の関わりもとても有効です。

K氏：今のデイは、自由にさせてくれるので良いです。家では3ヶ月程、家政婦さんが来ていたが、気を使いました。サ高住に入ってから、それなりに一人でできるようになりました。ヘルパーの助けもあり、できなかつたことができるようにもなりました。

職員：Kさんは、入居当時はトイレも自力では不可能でしたが、今では出来るようになりました。できることは自分でして頂いています。

地域：Kさんが、サ高住に入居したきっかけが知りたいです。

K氏：主人が亡くなり、一人になり、娘3人も結婚しているので、しょうがないと思い、考えて決めました。養老院のイメージが強かったが心配は、ありませんでした。最初からわりと介護職員と打ち解け、今では言いたいことが言えます。最初から自分の気持ちをさらけ出すことです。

職員：せいりょう園のデイでは、曜日ごとのアクティビティがあり、見て選ぶ方もおられます。

地域：新聞記事でデイサービスのアクティビティにゲームや麻雀で賭け事があると知りました。麻雀好きの人なら徐々にお金をかけるかもしれないですね。

職員：自分の好きな事、やりたい事、興味のある事で外に出かけるのは良い事ですが、税金が使われている介護保険で行うアクティビティとしては今後問題になるかもしれないです。



地域：最近是一般家庭を開放して行うデイなど、様々なデイがあります。見学して、自分に合う所を、元気な今のうちに探しておく事が理想です。

地域：情報を知っているという事と情報が得られる場所を知る事は、とても大切です。

職員：この語ろう会の場合は、職員にとっても、地域の皆さんの貴重な生の意見が聞ける場でもあります。今日は参加して頂き有難うございました。